

出エジプト記10-11章 「頑なさによる大いなる奇跡」

1A 頑ななままにされるファラオ 10

1B 根こそぎにするイナゴ 1-20

1C 雹を免れた草木 1-6

2C 壮年だけ 7-11

3C 東風による群れ 12-20

2B 真っ暗闇 21-29

1C 手に触れる闇 21-23

2C 羊と牛 24-29

2A 頑なさに怒るモーセ 11

1B 去らせる災い 1-3

2B 長子の死 4-10

本文

出エジプト記 10 章を開いてください。私たちは、エジプトに下る十の災いのうち、7 つまでを見ました。十の災いは、初めの九つの災いと、最後の、ファラオがエジプトからイスラエルの民を出て行かせる災いに分けられます。その初めの九つの災いは、三周忌、三つのラウンドに分けられます。第一ラウンドが、ナイル川の血、かえる、ブヨでした。第二ラウンドが、アブ、家畜の疫病、腫物でした。そして第三ラウンドの始まりが、雹でした。雹によって、人、家畜、草木が倒れました。しかし、少し残っていたんですね。まだ土の中で芽を出している小麦は、難を免れたのです。ファラオはなおも、罪に身を任せて、心を硬くしました。主は、そこで、この頑なさの中で、ご自分の力と栄光を一気に示されます。それが 10 章また 11 章です。

1A 頑ななままにされるファラオ 10

1B 根こそぎにするイナゴ 1-20

1C 雹を免れた草木 1-6

¹主はモーセに言われた。「ファラオのところに行け。わたしは彼とその家臣たちの心を硬くした。それは、わたしが、これらのしるしを彼らの中で行うためである。²また、わたしがエジプトに対して力を働かせたあのこと、わたしが彼らの中で行ったしるしを、あなたが息子や孫に語って聞かせるためである。こうしてあなたがたは、わたしが主であることを知る。」

主は、ファラオの心の頑なさを、そのまま捨て置かれます。彼が自分の身を罪に任せている中、その中でご自身のできることを行われます。それが、「わたしは彼とその家臣たちの心を硬くした」ということの表現です。

そこで、その中で主が行われることが二つあります。「わたしが、これらのしるしを彼らの中で行うため」ということで、もう一つは、「あなたが息子や孫に語って聞かせるため」であります。10章と11章は、この前者、しるしをエジプト人の中で行うためであります。主がご自分の恐ろしい力、偉大さ、正しさを示すのです。そして12章以降で、この神の働きを思い起こすため、子どもたちに教えなさいとして、過越の食事をするように教えて行かれます。

私は、黙示録を思わざるを得ません。地上の人々が神に反抗し、神を罵っている中で、主が次々と災いを下します。それによって、神の真実、正しさがますます現れます。神のさばきにある、神の力と栄光、その正しさを証ししていかれるのです。

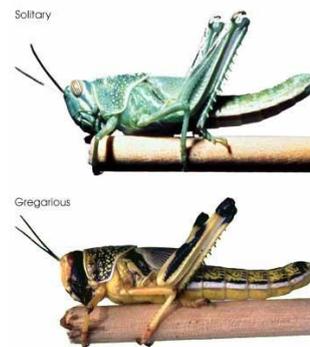
³ モーセとアロンはファラオのところに行き、彼に向かって言った。「ヘブル人の神、主はこう言われます。『いつまで、わたしの前に身を低くするのを拒むのか。わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。』」

「わたしの前に身を低くする」というのが、聖書の語る謙虚です。人の前で行っても、神に対して行わないのは、へつらいと言って、謙虚ではありません。一見、人に良さそうな人であっても、神ご自身の前で、心砕かれている時に、まことのへりくだりを自分のものにします。心の貧しい人は幸いです、悲しむ者は幸いです、そして柔和、へりくだる者は幸いです、ということです。

⁴ もしあなたが、わたしの民を去らせることを拒むなら、見よ、わたしは明日、いなごをあなたの領土に送る。⁵ いなごが地の面をおおい、地は見えなくなる。また、雹の害を免れてあなたがたに残されているものを食い尽くし、野に生えているあなたがたの木をみな食い尽くし、⁶ あなたの家とすべての家臣の家、および全エジプトの家に満ちる。これは、あなたの先祖も、またその先祖も、彼らがこの土地にあった日から今日に至るまで、見たことがないものである。』」こうして彼は身を翻してファラオのもとから出て行った。

いなごの災いです。これは雹の災いよりもさらにひどいものであるか、教えています。雹はあくまでも地表にある作物を倒したのですが、いなごは地中にある芽までも根こそぎ食べつくしてしまします。

いなごの襲撃は、とてつもなく恐ろしいものです。2011年のニュースでは中国ウイグルで蝗が大量発生で被害を受けたそうです。一平方^キメートル当たり2500匹という密度であったそうです。つまり一平方^キメートル当たりになると2500万匹になります。襲来後の土地は何年も耕作ができなくなってしまうようで、単なる旱魃よりも被害は酷いです。いなごにも、いろいろな種類があり、個体で動くものもあるのですが、相変異と言って、本来の



緑ではなく黄色や黒に変化するそうです。とてつもない大群で飛翔するそうで、なんと風に乗って、一日辺り 100-200 キロを飛行するのだそうです。高度も、二千キロというとてつもない高さです。アメリカ、中東、アジアの一带で飛んでいるいなごを、「サバクトビバッタ」といいます。



聖書ではヨエル書というところに、ユダに蝗が襲う預言があり、それが一糸乱れず大量に押し寄せてくる軍隊の予兆となっています。そして黙示録9章では、なんと悪霊がいなごのような形をして大量に現れ、尾にはサソリのような棘があり、五か月の間、苦しみ悶えますが死ぬことさえできないというホラー映画よりも恐ろしいことが起こります。

エジプトの神々では、ネプリ(Nepri)と呼ばれる、穀物の神がいます。しばしば大麦、小麦の麦と関連付けられました。エジプトの豊かさを示していますが、この神が裁かれます。

さらに、その規模が、人々がエジプトの地に住んでから初めての事、見たことのないことだということです。私たち人間は、「いつものことだ」として、主が何かしるしを与えても、注意を寄せないことがあります。しかし、前代未聞のことであれば自分の知見や経験により頼むことができなくなり、恐れに満ちます。そうやって、主がご自身を証しされるのです。

そして、モーセは、「身を翻してファラオのもとから出て行った」とあります。もう、強情でどうしようもない心、頑なな心に対して、怒りをもって対峙しています。後で、「怒りをもってファラオのところから出て行った」とあります(11:8)。主ご自身もそうでしたね、数多くのしるしを行っているのに、なおのこと天からのしるしを、パリサイ人たちが求めました。「マル 8:12-13 イエスは、心の中で深くため息をついて、こう言われた。「この時代はなぜ、しるしを求めぬのか。まことに、あなたがたに言います。今の時代には、どんなしるしも与えられません。」¹³ イエスは彼らから離れ、再び舟に乗って向こう岸へ行かれた。」彼らの頑なさを見て、嘆かわしい、怒りに近い思いで、彼らからはなれて、再び舟に乗られました。

2C 壮年だけ 7-11

⁷ 家臣たちはファラオに言った。「この男は、いつまで私たちを陥れるのでしょうか。この者たちを去らせ、彼らの神、主に仕えさせてください。エジプトが滅びるのが、まだお分かりにならないのですか。」

ついに、家臣たちがしびれを切らします。いなごなんか来たら、もうエジプトは滅ぼされてしまう、それがお分かりにならないのですか？ということです。しゅしゅ、ファラオは応えます。

⁸ モーセとアロンはファラオのところに連れ戻された。ファラオは彼らに言った。「行け。おまえたちの神、主に仕えよ。だが、行くのはだれとだれか。」⁹ モーセは答えた。「若い者も年寄りも一緒に行きます。息子たちも娘たちも、羊の群れも牛の群れも一緒に行きます。私たちは主の祭りをするのですから。」¹⁰ ファラオは彼らに言った。「私がおまえたちとおまえたちの妻子を行かせるようなときには、主がおまえたちとともにあるように、とでも言おう。だが、見ろ。悪意がおまえたちの顔に表れている。¹¹ そうはさせない。さあ、壮年の男子だけが行って、主に仕えよ。それが、おまえたちが求めていることではないか。」こうして彼らはファラオの前から追い出された。

午前礼拝でお話した箇所です。ファラオは、主が言われていることを全て行わなくてよい、要は、お前たちはこれをしたいのだろうか？と仕向けているのです。壮年の男子たちが、そういったことを考えているのであり、よくわかっていない女子供、お年寄りがなぜ関わる必要があるのか？ということです。いえいえ、家族すべてが神を信じて、神の言われるとおりに動くのです。

今の世は、個人主義が発達しています。そういった世の教えが、我々キリスト者にもやってきます。「あなたの信じていることは、あなたの心のうちに収めておきなさい。それを、他の人々に押し付けてはいけません。」となるのです。あなたは、あなた。わたしはわたし、となります。いえ、私たちは、交わり会で学びましたが、私たちの信じている神ご自身が、交わりにおいて、父、子、聖霊が一体なのです。妻は、夫に結ばれています。一体です。そして、子どもがその結実です。家において、信仰が継承されます。

3C 東風による群れ 12-20

¹² 主はモーセに言われた。「あなたの手をエジプトの地のの上に伸ばし、いなごの大群がエジプトの地を襲い、その国のあらゆる草木、雹の害を免れたすべてのものを食べ尽くすようにせよ。」¹³ モーセはエジプトの地のの上に杖を伸ばした。主は終日終夜、その地の上に東風を吹かせた。朝になると東風がいなごの大群を運んで来た。¹⁴ いなごの大群はエジプト全土を襲い、エジプト全域にとどまった。これは、かつてなく、この後もないほどおびただしいいなごの大群だった。¹⁵ それらが全地の表面をおおったので、地は暗くなり、いなごは地の草と、雹の害を免れた木の実をすべて食べ尽くした。エジプト全土で、木や野の草に少しの緑も残らなかった。

東からの風は、聖書では、いつもこのように災いをもたらしています。あるいは、水を枯らすような、砂漠の熱風です。それがいなごの群れを運んできました。そして、ファラオが、まだ土の中にある小麦の芽は残っているので、頑なになっていましたが、ついになごは、それらも根こそぎです。

ところで、またセト(Seth)と呼ばれる神がおり、嵐、混乱、破壊の神です。砂



漠の風や、予測不能な自然の力の神です。頭は犬、一部はロバの人の形をしています。セトが、この嵐に抗うことができなかったことを示します。

¹⁶ ファラオは急いでモーセとアロンを呼んで言った。「私は、おまえたちの神、主とおまえたちに対して過ちを犯した。¹⁷ どうか今、もう一度だけ私の罪を見逃してくれ。おまえたちの神、主に、こんな死だけは取り去ってくれるよう祈ってくれ。」

ついに、ファラオの口から、「私は、おまえたちの神、主とおまえたちに対して過ちを犯した」と言っています。しかし、その告白は、行いの実に裏打ちしていなければ意味がありません。けれども、ここまで言っているのは、「こんな死だけ」と言っているように、死を見ていると思ったからです。ファラオは、自分の苦しみから救われたい一心なのですが、それだけなのです。

¹⁸ モーセはファラオのところから出て、主に祈った。¹⁹ すると主は風向きを変え、非常に強い、海からの風とされた。風はいなごを吹き上げ、葦の海に追いやった。エジプト全域に一匹のいなごも残らなかった。

海というのは地中海から来ているものです。温暖な、湿気を含んだ風ですが、いなごの襲来も噴き上げてしまうのですから、すごいです。

ところで、「葦の海に追いやった」とあります。これは紅海のことです。紅海は、シナイ半島を挟んで、東はアカバ湾と呼ばれます。西がスエズ湾と呼ばれます。この海は、スエズ湾のほうの紅海です。一部の人たちは、出エジプト記で紅海が分かれるという時は、アカバ湾のほうだといいますが、いなごが、アカバ湾まで飛んでいったとは考えにくいです。

²⁰ しかし、主がファラオの心を頑なにされたので、彼はイスラエルの子らを去らせなかった。

ファラオがここまで心を頑なにしているのを、主が確認しています。捨て置かれていると言ってもよいでしょう。そのまま、ファラオが頑なにまましておいて、ご自身のさばきを現しています。

主は、憐れみ深い方です。その恵みは千代にまでわたります。しかし、罰しない方か？というところ、決してそうではありません。憐れみが示されているのに、それを拒み続けるのであれば、残りは、容赦ない御怒りだけが残ります。その御怒りは、すでに捨て置かれているところに現れています。もはや、ヘブル 12 章にあります、「悔い改めの機会が残って」いないのです(12:17)。

乞食ラザロに対する、金持ちがハデスの火の中で苦しみました。自分の家の者にラザロを送ってくれとお願いしましたが、アブラハムは断りました。ラザロが生き返れば、聞いてくれると金持

ちは言いましたが、「いや、モーセと預言者に耳を傾けなければ、よみがえったのを見ても聞き入れない」と断言しました。(ルカ 16:16-31)もう、聞き入れないと決めていて、それでいて、ただ苦しいから助けてくれ！と言っているだけなのです。

いろいろ「話せば分かります」と言って、時間稼ぎをする人がいます。悔い改めたかのようにみせていて、自分のしていることの報いははっきりしているのに、それをエサウのように、涙を流して後悔をしたりはしますが、心は入れ替えていないのです。むしろ、悔い改めている仕草をして、自分が裁きから免れようとする動機が働きます。これが、ファラオの姿であり、後悔はしても、悔い改めない者の姿です。

2B 真っ暗闇 21-29

1C 手に触れる闇 21-23

²¹ 主はモーセに言われた。「あなたの手を天に向けて伸ばし、闇がエジプトの地の上に降りて来て、闇にさわれるほどにせよ。」

ついに、九つの災いの最後になりました。警告なしの災いです。闇が触れる程にせよ、というのは単に暗いだけでなく、洞窟の中にいるような暗さであります。目が暗さになれてもなお何も見えない状態、目の一センチ先で指を動かしても見えない状態です。私もかつて、妻と共に、アメリカの東海岸にある、ある洞窟に入りました。洞窟の中で、案内人が光を数秒、消しました。あの時の闇は、本当の闇です。さわれるようにする、というのは、こういうことを言うのだなと思いました。

ところで、エジプト人にとっては、太陽にまつわる神々はたくさんいました。ラーという太陽神がいます。大気の守護神、豊穡神であるアメンと一体化して、「ラー＝アメン」とも呼ばれていました。そしてその他のいろいろな代表的な神々も、何らかの形で太陽を宿しています。太陽という存在がそれだけ彼らには大きかったのです。



²² モーセが天に向けて手を伸ばすと、エジプト全土は三日間、真っ暗闇となった。²³ 人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかった。しかし、イスラエルの子らのすべてには、住んでいる所に光があった。

今、話した真っ暗闇が、三日続きました、エジプト人は半狂乱状態に陥ったことでしょう。終わりの日、大患難においても、獣の座に鉢がぶちまけられ、王国全体が闇に覆われ、人々が苦しみのあまり舌をかんだ、とあります(16:10)。

しかし、ここでもイスラエルには救いを与えられました、光があります。イエスは、「わたしは世の光です。(ヨハネ 9:5)」と言われましたが、神の与える暗闇の中でも、希望も何もない罪に満ちた世にあっても、キリストにあつて私たちは光を持つことができます。

2C 羊と牛 24-29

²⁴ ファラオはモーセを呼んで言った。「行け。主に仕えるがよい。ただ、おまえたちの羊と牛は残しておけ。妻子はおまえたちと一緒にいってもよい。」

ファラオの、さらなる妥協です。妻子は連れていってもよい、と言っていますが、羊と牛は残しておきなさいと言っています。主のみことばについて、そのまま従わなければ意味がありません。その、何か条件を付けて、それで従うのであれば、全く聞き従っていないのと同じなのです。サウル王が、サムエルの預言に従ってアマレク人と戦いましたが、王を残し、牛や羊を残しました。けれども、彼は主に従ったと言いました。いいえ、結局、偶像礼拝と同じだとサムエルは言いました。

²⁵ モーセは言った。「あなた自身が、いけにえと全焼のささげ物を直接私たちに下さって、私たちが、自分たちの神、主にいけにえを献げられるようにしなければなりません。²⁶ 私たちの家畜も私と一緒にいきます。ひづめ一つ残すことはできません。私たちの神、主に仕えるために、家畜の中から選ばなければならないからです。しかも、あちらに着くまでは、どれをもって主に仕えるべきか分からないのです。」

午前礼拝で話しましたように、私たちが、どこに時間を使っているのか。どこにお金を使っているのか？によって、心が主に定まっているかがわかります。心は主に一つになっていると言いながら、自分が物理的にしていることに、それが表れていなかったら、その言葉自体が偽りなのです。礼拝においては、財産も含めて、この方に献げます。献げることなしには、礼拝とは呼べません。

²⁷ しかし、主がファラオの心を頑なにされたので、ファラオは彼らを去らせようとはしなかった。²⁸ ファラオは彼に言った。「私のところから出て行け。私の顔を二度と見ないように気をつけろ。おまえが私の顔を見たら、その日に、おまえは死ななければならない。」²⁹ モーセは言った。「けっこうです。私はもう二度とあなたのお顔を見ることはありません。」

ファラオは、自分は十分に折れていると思っています。それをモーセがきっぱりと断ったので、ファラオはモーセを怒っています。逆切れです。モーセも、怒っていますね。「もう二度とあなたのお顔を見ることはありません」

これでは、まるで人間のぶつかり合いです。どちらも、これで金輪際、合わないとしています。

ファラオは、自分のプライド、文字通りの王座に着いている人ですが、心に王座があり、そこから自分が降りるつもりはありませんでした。だから、イスラエルを手放すことは耐え難く、自分のものにしておくことが、王であることの証しだと思っていました。手放すことができないのです。私たちはどうでしょうか？主に従うという時に、自分が中心になるように、完全に手放すことをしていないことはないでしょうか？

2A 頑なさに怒るモーセ 11

1B 去らせる災い 1-3

¹ 主はモーセに言われた。「わたしはファラオとエジプトの上に、もう一つのわざわいを下す。その後で彼は、あなたがたをここから去らせる。彼があなたがたを去らせるときには、本当に一人残らず、あなたがたをここから追い出す。

今、「私はもう二度とあなたのお顔を見ることはありません」と言ったばかりのモーセですが、主に引き止められました。もう一つ、最後の災いがあるということです。そして、それで初めて、無理やりにもファラオが、イスラエルの子らを去らせることになるということです。

² さあ、民に言って聞かせよ。男は隣の男に、女は隣の女に、銀の飾りや金の飾りを求めるように。」

もうエジプトを出て行くのであるから、金銀をエジプト人に求めなさいとのことです。これは、強盗ではありません。むしろ、これまで奴隷として使役されて、それで、一切、給料がなしに働き続けて、今、ようやく賃金らしき賃金を受け取ることができます。

そして、これらの金銀は、荒野における天幕で用います。自分のためではなく、主への礼拝のために用いられます。私たちも、世の富によって友を作りなさいと言われていましたね。

³ 主は、エジプトがこの民に好意を持つようにされた。モーセその人も、エジプトの地でファラオの家臣と民にたいへん尊敬された。

彼らに金銀を求めても、彼らは渡してくれます。なぜなら、好意を持っているからです。これは驚きです。彼らは、ひどい災いを被っているのにも関わらず、このように思われているということは、どういふことでしょうか？

ファラオのあまりにも横暴な振る舞いと頑なさが明らかにされました。それに対して、モーセには誠実さや聖さがあります。また、エジプトの神々のむなしさを知ったのかもしれませんが、ことごとく滅んでいき、神々は無に等しいと、うすうす分かってきたのかもしれませんが。妥協なき姿勢を取って

いれば、かえって好意や尊敬が伴ってくるのです。確かに、エジプトに対して伝道の種が植えられていました。

2B 長子の死 4-10

⁴ モーセは言った。「主はこう言われます。『真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に出て行く。

エジプトにおいて、その宗教の中で、数々の祭りにおいて、その大きなものには神々が中に出て行くというというものがありました。ここでは、主ご自身が出て行って、彼らに対して裁きを行います。

⁵ エジプトの地の長子は、王座に着いているファラオの長子から、ひき臼のうしろにいる女奴隷の長子、それに家畜の初子に至るまで、みな死ぬ。⁶ そして、エジプト全土にわたって大きな叫びが起こる。このようなことは、かつてなく、また二度とない。』

裁きは、「長子」あるいは「初子」を殺すというものです。人であれば、初めに生まれてきた男子が長子で、家畜も初めに生まれてきた雄が初子です。それが、ファラオの長子を始めとし、ひき臼の後ろにいる女奴隷の長子に至るまでとありますが、最も底辺にいる、身分の低い人の長子まで、ということです。そして家畜もその難を逃れることはできません。

なぜ、このことをもってファラオは出て行かせることにするのでしょうか？これは、ファラオ自身が神とされていたことの、究極の裁きだからです。ファラオがエジプトの神々の中でも長であって、彼によって、エジプト人は命が与えられ、豊かさが与えられていると信じられていました。そのファラオの長子こそが、その神を受け継ぐ神、つまり神の子であります。

そしてファラオの恩恵によって、エジプト人の全ての命がかかっているのであり、ファラオの息子が死ぬことによって、その他の全てのエジプト人の長子と初子が死ぬということを意味して、ファラオの神は死んだということを示していました。

⁷ しかし、イスラエルの子らに対しては、犬でさえ、人だけでなく家畜にも、だれに対してもうなりはしません。こうして主がエジプトとイスラエルを区別されることを、あなたがたは知るようになります。

犬でさえ、唸りはしないというのは、全く平穩そのものだということです。こうして、イスラエルは区別されることによって救いが置かれていたことを見してきました。

⁸ あなたのこの家臣たちはみな、私のところに下って来て、私にひれ伏し、『あなたもあなたに従う民もみな、出て行ってください』と言うでしょう。その後私は出て行きます。」こうして、モーセは怒り

に燃えてファラオのところから出て行った。

家臣がしびれを切らして、ファラオを出し抜いて、モーセのところに来て、出て行ってさいということになるということです。ファラオは最後の最後まで、心を頑なにしていることを知って、それで、モーセは怒って出て行っています。しかし、次の現実を主からモーセは突きつけられます。

⁹ 主はモーセに言われた。「ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。わたしの奇跡がエジプトの地で大いなるものとなるためである。」

聞き入れないと宣言されてしまいます。しかし、その頑なさによって、主が大いなる奇跡をエジプトで行われます。紅海が分かれて、民がそこを歩くということです。

¹⁰ モーセとアロンは、ファラオの前でこれらの奇跡をすべて行った。主はファラオの心を頑なにされ、ファラオはイスラエルの子らを自分の国から去らせなかった。

これが、まとめです。モーセが、ファラオは私の言うことを聞かないでしょうと訴えた時に、主は否定されませんでした。しかしモーセは、この頑なになるということに、神はご自身の目的があることを知り、知っただけでなく、覚悟して受け入れました。事実、最後まで聞き入れず、自分の国から出させないのです。

同じことを、主は行われましたね。ユダヤ人の指導者たちの頑なさです。彼らが信じず、キリストを十字架につけたという、頑なさをおして、大いなる奇跡を行われました。十字架につけられ、三日目に葬られ、そしてよみがえるということです。彼らが信じていなかったために、神はかえってご自分の栄光を表すことができました。

周囲に、また社会に、国に、世界にその頑なさを見るかもしれません。しかし、私たちはその背後にある、もっと大きなレベルでの神のご計画があることを知しましょう。